

たのしい学び。本当の学び。大人も子どもも！

DISCE LIBENS! 2020
Feb. 発行

年刊

山びこ通信

学校法人 北白川学園
山の学校 2019年度
クラス便りとエッセイ
LVDVS COLLINVS

クラス一覽 ページ

ことば³ かず^{3,6} しぜん²⁴ かいが²⁶ つくる^{22,23} れきし¹⁰ 将棋²¹

西洋の児童文学を読む²

西洋古典を読む⁵

東洋古典を読む

数学^{6,8,9}

数学を哲学する⁸

英語^{12~14}

漢文¹⁴

現代ギリシヤ語¹⁷

ギリシヤ語^{19~21}

ラテン語^{19~21}

イタリア語¹⁸

ロシア語¹⁸

フランス語^{16,17}

ドイツ語¹⁵

山の学校ゼミ『調査研究⁴ / 倫理⁹ / 日本文化論を読む。 / 西洋近代思想の古典を読む¹¹』

読解力を高めるために 山の学校代表 山下 太郎

中高生の読解力低下が深刻な問題として報道されるようになりました。科目を問わず教科書の日本語の理解がおぼつかなくなっているとのこと。このことを裏付ける様々な報告やデータの類に目を通すと、授業中に苦労を余儀なくされている子どもたちの姿を思い、暗澹たる気持ちになります。

学校の勉強を支える基本は国語（日本語）の力であることは間違いありません。社会に出てからも同様です。ではどうやってこの力を伸ばすことができるのでしょうか。読書が大事な役目を果たすことは言うまでもありません。だからといって子どもたちに読書を強いるだけでは、本嫌いを量産するだけでしょう。子どもが本を読むことを好み、自ら進んで読書に親しむには、家庭での読み聞かせと音読の習慣が大きな鍵を握っています。

読み聞かせは、できれば小学校高学年になるまで継続していただきたいです（就寝前の十分などに）。幼稚園時代は絵本を一緒に見ながら親が文章を音読し、小学校の子どもには絵のない本をそのまま朗読します。小学生向けの児童文学の傑作は無数にありますが、親自身が読んで面白いと思える本を選択し、子どもに読んで聞かせます（子どもと交代で読み合うのも一案です）。何日もかけて一冊の本を読み切めることは親子双方にとってよい思い出になるでしょう。

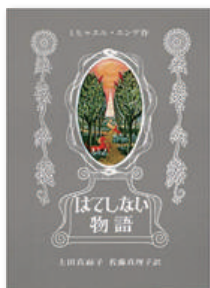
子どもは幼稚園時代から文字への憧れを持っています。読み聞かせが習慣になっている家庭では、子どもは幼少時代から見よう見まねで音読を始めます。それはよい意味で一種の遊びなので、小さいうちはたどたどしい読み方でもそのまましておくのがよいでしょう。最初から細かな読み方のチェックをすると、やがて音読そのものを嫌悪するようになります。読み聞かせを通じて親が音読の手本を示しているのに、変な読み方が身につく心配はありません。

小学校に上がれば、国語の教科書を開け、一緒に音読の練習に付き合ってください。これを子ども任せにする家庭が多いようですが、子どもは自分一人の力で最初から上手に文章を読むことはできません。親が手本を示し、子どもに復唱させるところからスタートします。自分一人で詰まらずに最後まで読めるようになって、繰り返し練習することの大切さを伝え、じっくり丁寧に練習に付き合ってください。親も子といっしょに文字を目で追い、間違った読み方に気づけばその都度指摘します。

中学に入ったら、自分で音読の大事さに気づいてほしいと思います。学年と科目を問わず、音読は「読めば読むほどよい」ものです。「読書百遍意自ずから通ず」は現代にも通じる金言です。キケローに「肉体は鍛錬による疲労で重くなるが、精神は鍛えることで軽くなる」という言葉がありますが、たしかに運動場のランニングは一周目より十周目がヘトヘトになるのに対し、音読の場合、読めば読むほどスラスラと楽になり、読み通すのに必要な時間も短くなります。ために英語の文章を声に出して読んでみましょう。ストップウォッチをもって測定すると、一回目の読みに要する時間より、十回目に読む時間は大幅に短縮し、さらに理解も深まるのでお勧めです。音読を十分に練習した人は、黙読、精読、速読のコツも自然に会得できるでしょう。（山下太郎）

『西洋の児童文学を読む』A（小学5～6年）

担当 福西 亮馬



『はてしない物語』（エンデ、上田真而子ら訳、岩波書店）を読んでいます。4月から読み始め、現在は18章です（全26章）。

前半（1～13章）では、虚無に襲われた空想世界ファンタージェンを救おうとするアトレューユの活躍。その記された『はてしない物語』を、バスチアンが読みふけります。

後半（14～26章）では、本の中に入り込んだバスチアンが、女王幼ごころの君に新しい名前を付けて、ファンタージェンを救います。その後、女王からどんな望みもかなえるアウリンを授かり、一つ一つ望みをかなえていきます。それは、元の世界への帰り道を失うことと紙一重の、自身の「真の望み」を知るための道でした。

22章「エルフェンバイン塔の戦い」では、ファンタージェンを二分する戦争が勃発します。バスチアンは、アウリンを取り上げようとするアトレューユに勝ち、帝王にまで登りつめます。しかし結局そのことでアウリンを失い、元の世界の記憶まで手放してしまいます。

この「行きて帰りし物語」は、よくぞこれを書いてくれたとエンデに喝采を贈りたくなるほど、心の中に起こりうる傲慢さとそれに対する治癒の、ぎりぎりの表現だと感じます。とりわけ24章の「変わる家」でどこまでも受容してくれるアイッオーラと、25章の「絵の採掘坑」で厳しい沈黙を教えてくれるヨルの書き分けが素晴らしく、この二人の存在は『はてしない物語』のとりことなった者の心からは、いつまでも去らないことでしょう。なお、予定では読了は7月です。今からでも、途中参加を歓迎いたします。

『西洋の児童文学を読む』B（中学生）

担当 福西 亮馬



「ぼくの友だちにも会ってくれなくっちゃ。ティウリ騎士だ。ぼくは、ティウリ騎士の盾持ち。さあ、行こう。そしたら、ぼくたち、何もかも話してあげる……」

——『白い盾の少年騎士』（下）p365

2017年4月（小学5年生）から始まった『王への手紙』（上・下）と『白い盾の少年騎士』（上・下）（トンケ・ドラフト、西村由美訳、岩波少年文庫）の全4冊シリーズ。長かったこの講読も、2020年1月に読了しました。受講生のみなさま、おめでとうございます。

次に始まった『はてしない物語』（エンデ、上田真而子ら訳、岩波書店）も、繰り返し読むことで深まる作品の一つです。ぜひこちらも精読での読了を目指しましょう。

さて、もしこれから読もうという方のために、先の作品を改めて振り返ってみます。『王への手紙』は、騎士見習いティウリが、ある騎士の死によって託された手紙（それには国の危機が記されていました）を王へ届けるというものです。手紙の秘密を誰にも打ち明けられず、あやしまれて捕まったり、手紙を破棄して暗記せねばならなかったりと、手に汗握る展開です。とはいえもっとも印象深いのは、ティウリが秘密を共有できた唯一の人物、ピアックとの友情でしょう。その印象があまりにも強いせいで、ピアックは物語のはじめからずっといたようにさえ思われることでしょう。

続編の『白い盾の少年騎士』では、前作の危機が現実になります。その背景にあるのは、国王の双子の息子の運命です。一人は皇太子となり、もう一人は出奔して隣国の王となりました。その決着に、ティウリとピアッ



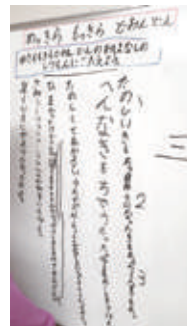
クもまた重要な役目を担います。しかし結末は、「そうなってはほしくなかった」というものでした……。

最後に、冒頭の引用がピアックのセリフであることを記し、物語の中の二人が受講生たちの心の中にいつまでもあることを願って、筆をおきます。

『かず』1~2年 『ことば』1年

担当 坂本 晃平

今回は生徒さんが1名だったので、かなり自由なクラスだったと思います。ある時には講師が山の学校に到着するとすでに板書がしてあり、またある時には「こくご」の先生をしてくれたり、またある時にはボードゲームのルールを習いながら遊んだり、あれれどっちが先生だったっけ、と思うことがなにもありました。ボードゲームではボコボコに負けることもあり、また「さんすうははかせ」、つまり「さんすう」の問題を解く時には「はやく」「かんたんに」「せいかくに」という標語も教わりました。Docendo discimus（教えることによって学ぶ）というよりも教わりっぱなしだったと言ってもいいかもしれません。とはいえさすがに「さんすう」で負けることはありませんでしたが。



ともかく、マンツーマンクラスだったので多人数では難しい応用的な問題に取り組んでみたり、そしてそういった問題に取り組むあいだ質問をしながら思考過程の言語化を試みたり、はたまた問題を作ってもらってそれを解説してもらったりと、多様な取り組みを行うことができました。とくに「かず」のクラスでは、小学校1年生向けのかんたんな問題は難なくこなしてしまうので、魔法陣を解いてみたり、100より大きい数字の操作を試みたり、いわゆる「等差数列」の問題に取り組んでみたり、硬貨の組み合わせの数を考えたりと、論理的思考力のさまざまな訓練ができたと思います。「ことば」のクラスは主として本読みをしてもらいました。以前もブログに書いた覚えがありますが、感情豊かに読んでくれた時の驚きは今でも覚えています。概して、生徒さんの主体的精神が見て取れた講座だったと思います。

『ことば』1~2年

担当 福西 亮馬

このクラスでは、本読み、俳句、紙芝居の時間をとっています。



本読みでは、『黒ねこサンゴロウ』（竹下文子、偕成社）のシリーズを扱っています。2019年2月から読み始め、現在は第5巻を読んでいます。徐々に見えてくる島々の世界観と、船乗りであるサンゴロウの生き方がますます面白くなってきました。シリーズものの醍醐味だと思います。



俳句では、主に高浜虚子以降の時代の句を取り上げています。1年間で紹介した句は、季語だけお伝えすると、以下の通りです。

春の季語：春の月、水温（ぬる）む、燕、猫の子、チューリップ、桃の花

夏の季語：五月雨（さみだれ）、滝、あめんぼ、青蛙、かぶと虫、てんとう虫、
蠅、螢、蝉、たけのこ、空豆、さくらんぼ

秋の季語：野分（のわき）、いわし雲、稲光、秋の暮、すすき、どんぐり

冬の季語：冬はじめ、冬蜂、冬菊、大根、寒星

一方で俳句を作った受講生には、タイプして返却しています。すると K 君がお家の人と句集（第一句集！）を編んでくれるという出来事がありました。奥付の





作者紹介には「絵を描くことや本を読むこと、ことば、ものづくりが大好きな小学1年生」とありました。代表句は「そらの上ひつじのむれがどこまでも」。ぜひ応援しています。

ところで、俳句はいつでも調子よく作れるわけではありません。そんな時は『歳時記』を開くことをおすすめします。受講生のみなさんの手元には、『ことば歳時記』（長谷川權監修、季語と歳時記の会）があると思います。それを眺めれば、すてきだと感じる句、いつか句にしてみたい季語が見つかることでしょう。また、季語を知ると、自然の変化を待つことが一日単位で楽しみになります。

紙芝居では、私自身が夢中になれる作家を見つけました。諸橋精光という方です。この方の画・脚本の作品をいま、片端から探して読んでいます。クラスでは『注文の多い料理店』（宮沢賢治原作、鈴木出版）が特に人気でした。受講生から「読んで、読んで」と言われると、とても読み甲斐があります。次のストックを探す私自身にとっても楽しみな時間の一つになっています。

『ことば』3～4年

山の学校ゼミ『調査研究』『倫理』

担当 浅野 直樹



今年度は、ことばクラスで即興の物語を作るという取り組みをしたことと、調査研究クラスで2年ぶりの発表会をしたことが印象に残っています。

どちらも何もないところから自由に内容を作り上げました。自由に内容を作り上げるといっても、そこには法則性があります。調査研究クラスではこれまでの発表や倫理クラスで取り上げたものを含む先行研究を踏まえて議論をするので法則性があるのは当然です。良くも悪くも先行研究の枠組みを参照しているわけです。物語についても、自分で即興の物語を作ろうとしたら気づくように、多かれ少なかれ過去に読んだ物語などの枠組み

に載せることになります。自由に話してもよいと言われても思うように自由には話せないというのは興味深い背理です。「このようなことを言ったら笑われるだろうか」といった検閲を排除したとしてもそうなのです。

即興の物語も調査研究の発表も、私のほうから感想をフィードバックしています。その際には、断定的な解釈や意見を伝えるのではなく、できるだけ発想がさらに広がっていくようなコメントをするように心がけています。先に述べたように究極的には自由に表現できないとはいっても、せめて余計な気遣いはせずに思っていることを表現してもらいたいからです。時折目を見張るような発想や表現に出くわすのが楽しみでもあります。

『ことば』5～6年

担当 福西 亮馬

『西遊記』（呉承恩原作、渡辺仙州翻案、偕成社）の上・中・下の三巻を読了し、現在は『クマのプーさん』（ミルン、石井桃子訳、岩波少年文庫）を読んでいます。読み終わった章ごとに要約をしています。要約は慣れるまでが大変ですが、作者をそばに感じたり、新しい発見があると急に楽しくなります。それまではコツコツ続けてみましょう。

『西遊記』は、悟空の誕生から五行山に封じられるまでの序盤では、天界や閻魔界での悟空の行動が痛快でした。三蔵のお供になってからの中盤以降では、悟空の精神的な成長に共感しました。三蔵、八戒、悟浄、白竜、そして妖怪たちのキャラクターもそれぞれ立っており、次はだれが主役で、どんな妖怪の話なのか、ワクワクしながら読めたことも大き





いです。いつかそのことを思い出してくれたら、『西遊記』（呉承恩原作、中野美代子訳、岩波文庫）の全十巻にもアクセスしてみてください。

『クマのプーさん』は、大人も読んで損のない名作です。プーやコブタの心理描写、とっさにごまかしたくなる恥じらいや、気まずい気づかいなど、誰にでも心当たりのあるシチュエーションには共感します。また登場人物が「読まないと動かない（読めば動く）」点には格別の愛着をおぼえます。それはどんな言葉にも置きかえられないたのしみです。もうすぐ読み終わりますが、予定では、続編の『プー横町にたった家』（ミルン作、石井桃子訳、岩波少年文庫）に進みます。

引き続きこのクラスでは、本を読む楽しさと、要約と、その二点を応援したいと思います。

『西洋古典を読む』（中高生）

担当 福西 亮馬

ウェルギリウス『アエネーイス』（岡道男・高橋宏幸訳、西洋古典叢書）を読んでいます。受講生にはテキスト（日本語訳）の音読、余力のある人には要約をしてもらっています。私からは日本語だとさっと読み飛ばしてしまうおそれのあるところを、ときに原文を引いて補足しています。2019年2月から始まり、現在は第3歌を読了しました。

当初の受講生は、現在中学2年生のA君でしたが、この12月から中学1年生のK君が加わりました。K君とA君、K君と私、そしてA君と私と、会話の流れが一度に3種類に増えました。そのことが新しい刺激となっているように感じます。

主人公アエネーアスは、全12歌の中で、トロイア戦争の敗者として海と陸とを放浪した後、新天地イタリアで戦争に勝ち、ローマの礎を築きます。そしてローマ人の範として、武勇と敬虔さのバランスの取れた英雄として描かれています。一見、非の打ちどころのないように思われますが、決して運命の操り人形でも、完璧でもないことが、読んでいくうちに分かってきます。

受講生のA君がその実感を次のように話してくれました。

「第2歌だけでも、アエネーアスは何度も選択肢を間違えて行動しているように思います。ヘクトルの霊に逃げろと言われた直後に、戦いに出たこと。ヘレネーを殺しかけたこと。父を説得できずに、短気を起こして戦場に駆け戻ろうとしたこと。クレウーサに後からついて来るように指示してはぐれてしまったこと。そのクレウーサを探すために一人でもと来た道をすっかり引き返した（そして待っている仲間を時間的な危険にさらした）ことなど」と。

他の場面でも、アエネーアスは運命とは異なる選択肢を選んだり、選びそうになります。カルターゴーに漂着する前には、嵐の中で生きることを厭います。カルターゴーの女王ディードーとは恋に落ち、ローマ以外の国を作る心配もありました。そしてイタリアでは、命乞いする敵将トゥルヌスを逡巡の末に、かっとなって、殺してしまいます。

けれども、アエネーアスの行動からは、運命を知らないがゆえの、その時その時の必死さが伝わってきます。もしそれが現代の読者の胸をも打つならば、作品に込められた普遍性とは、むしろそこにあるのではないかと思います。

全体で一萬行の詩ですが、どこから入っても味わえる作品です。興味を持たれた方はいつでもご参加ください。



「いくつかの連続な自然数の和が 1000 であるとき、この連続な自然数を求めよ」。これは山形大学の過去の入試問題です。

3桁足す3桁の足し算を習う小学3年生以上であれば、時間さえかければ解ける問題です。電卓を使ってもよいとするならもっと低い学年の生徒でも解けなくはないでしょう。順番に試していけばよいだけですから。

しかし、順番に試していくという方法では、大学入試の制限時間内には到底終わりません。また、ミスをしなとも限りません。本当に自分が出した答えしかないのかという確信も持てません。

そこで数学の出番です。私ならこう書くという答案を載せます。

n から m 個だけ連続する自然数の和が 1000 であるとする (m, n は自然数)。

$$n + (n+1) + (n+2) + \dots + (n+m-1) = 1000$$

$$\frac{1}{2} \cdot m \cdot (n+n+m-1) = 1000$$

$$m \cdot (m+2n-1) = 2000$$

$$m \cdot (m+2n-1) = 2^4 \cdot 5^3$$

m が偶数であれば $m+2n-1$ は奇数であり、 m が奇数であれば $m+2n-1$ は偶数である。

また、 n は自然数なので $2n-1 \geq 1$ であり、 m よりも $m+2n-1$ のほうが大きい。

(1) m が偶数のとき

$$m = 2^a \cdot 5^3, m+2n-1 = 5^{3-a} \quad (a=0,1,2,3) \text{ と表すことができる。}$$

m よりも $m+2n-1$ のほうが大きくなるのは $a=0$ のときである。

このとき $(m, n) = (16, 55)$ である。

(2) m が奇数のとき

$$m = 5^b, m+2n-1 = 2^4 \cdot 5^{3-b} \quad (b=0,1,2,3) \text{ と表すことができる。}$$

m よりも $m+2n-1$ のほうが大きくなるのは $b=0,1,2$ のときである。

このとき $(m, n) = (25, 28), (5, 198), (1, 1000)$ である。

以上より、求める連続な自然数は

55, 56, ..., 69, 70

28, 29, ..., 51, 52

198, 199, 200, 201, 202

1000

である。

どうせならばと、プログラミング (python) を使って解いてみました。順番に試していくという小学生的なやり方です。プログラムはそのような単調な作業が得意です。

```
print ("The answers are...")
for i in range(1001):
    if i == 1000:
        print (i)
        continue
    original_i = i
    for j in range(i+1, 1001):
```

```

i = i + j
if i > 1000:
    break
elif i == 1000:
    print (original_i, "...", j)
    break
print ("(finished)")

```

出力はこちらです。

```

The answers are...
28 ... 52
55 ... 70
198 ... 202
1000
(finished)

```

これくらいのレベルですと一瞬で計算が終わりますが、ものによっては、単純な繰り返し計算が得意なプログラムでも時間がかかることがあります。そういうときは、上の答案で示したような数学的な変形をしてからプログラムに落とし込みます。

この例からもわかりますように、単純なプログラミングをするのに論理的な思考力が要求されるのはもちろん、プログラムの実行速度を上げるためにはより一層数学的な力が必要になります。

『かず』 5～6年 A

担当 福西 亮馬

『図形のお話』（中田寿幸、実業之日本社）を読了し、次に『算数が好きになる本』（芹沢光雄、講談社）を読んでいます。後者は3月に読み終わる予定です。

『図形のお話』では、多角形や円、錐や柱、展開図、表面積や体積などのおさらいをしました。小学校の間は、形の世界と数の世界とは別々に感じますが、実はそうではありません。左右対称には偶数が対応するなどの密接な関係があります。脱線話では、次元、対称性、円周率の近似のことを話しましたが、形に潜む、あるいは形に迫る数理に興味を持っていただけならば幸いです。

『算数が好きになる本』の内容で一番時間をかけたのは、文章題の「割合」についてです。割合では、小さい数を大きい数で割ることや、1よりも小さい数が答になることへの慣れが求められます。そこをクリアすれば中学数学の準備はできたようなものです。また、出てきた答が題意に合っているかどうかのチェックも、算数が得意になる近道です。

引き続き本を読んで、小学校で学んだことを位置づけるお手伝いできればと思います。



『かず』 5～6年 B

担当 浅野 望



この授業では 2 つのことを重視しています。1 つ目はまず自分で考えてみることです。授業スタイルは毎回こちらで用意した数問を解くというものですが、前半の 30 分は自分ひとりで解いてもらっています。はじめのうちは生徒さ

んの間で戸惑いが見られたり、集中力が切れたりすることもありましたが、回を重ねるごとに自分なりに試行錯誤する様子が見えてきました。2 つ目は考えたことをみんなと共有することです。他の人に伝えることを通

して自分の思考を言語化できます。同時に、自分の解いた過程や分からなかったことが明確になります。算数だけに限らず、小学校高学年からは、直観だけでは答えを出すことが難しくなってくるので、問題を解く過程が大切になってきます。また、以上2つのことは他の科目はもちろんこれからの学習にも必要になってくる普遍的なものかと思います。

問題は紙とペンを使って解くものが多いですが、ときには折り紙や方眼紙を使った図形問題や、おはじきを用いたゲームなど、手を動かす機会も取り入れています。

『中学数学』

担当 浅野望

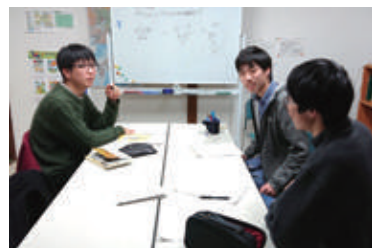
この授業は基本的には生徒さんの自習にしています。生徒さんからの要望だったのではじめのうちはこちらが戸惑っていましたが、ときどきとんでくる鋭い質問などから、自分でしっかり考えているのだと感じます。(「かず5~6年B」の方でも述べましたが、)学習においては自分で考えることと他の人に考えを伝えることの2つが大切です。この授業では、前者は自習で後者は質問であると思います。この調子で自分たちのペースで学んで欲しいです。

『数学を哲学する』

担当 入角晃太郎

今期より山の学校で数学を教えております。私が数学に取り組む際は、答えが出せても満足せずに、しばしば考え込み、その奥にある仕組みを捉えようと努めていたのですが、そうしたなかで頭の底に徐々に形成されていった「思想」を、この授業のなかでは話していきたいと思っています。例を挙げます。数学では言い換え、読み換えの力が大切だ、というのは聞いたことがあるかと思います。それは実際その通りなのですが、ではなぜ言い換えることが大切なのでしょう。それは、数学が、何かと何か等しいことを基礎に論証を進めていく学科だからです。例えば等式の左辺と右辺がそうです(しかし、数学が基礎にしている同一性は、等式だけではありません)。これは「言い換えれば」(ここにも言い換えが出てきました)、左辺を右辺で言い換えていると読むことができます。この際注意すべきなのが、右辺は左辺と同一ではあっても、両者がまったく同じ「意義」では方程式にはならないということです。「 x 分経って、そのあと $2x$ 分経ったら、全体で $3x$ 分経っていた」という事態を $x+2x=3x$ と立式しても、方程式にはなりません(これは恒等式です)。例えばとある三角形の面積についての方程式を立てるときは、その左辺と右辺では、同じ面積の違った導出方法を置いてやらねばならないのです。方程式と恒等式の違いは中学校で習いますが、このテーマを掘ってゆくと、「同一性とは何か」という問題に逢着します。方程式も恒等式も同一性言明であると言うことができますが、両者におけるイコールの意味が異なります。同一性は数学のいたるところに現れますが(だからこそ数学では言い換えが大切なのです)、同一性そのものについて踏み込んで考えることは、学校ではあまりなされません。そこで私は、敢えてこのような話をするようにしています。ちなみに、実際の授業で扱ったトピックは、「数学における虚構主義」、「数学における証明方法(とりわけ、同一法について)」です。

ただ、これらの話は少し抽象的すぎたかもしれません。そこで今後は授業中に(なるべく教訓的な)問題を解いてもらうなどしてみようかと考えています。やはり問題を解くことが、考えを駆動する大きなきっかけになるからです。



『「無限論の教室」を読む』

『「数学ガールの秘密ノート」を読む』 担当 福西 亮馬

このクラスでは、啓蒙的な数学の本を音読しています。4月からの半年間で『無限論の教室』（野矢茂樹、講談社現代新書）を読みました。その後、『数学ガールの秘密ノート 整数で遊ぼう』（結城浩、SBCreative）、『数学ガールの秘密ノート 式とグラフ』（同）の2冊を読了し、現在は『数学ガールの秘密ノート 学ぶための対話』（同）を読んでいます。

『無限論の教室』は、タムラ先生、タカムラさん、ぼくの3人の対話によるユニークな物語です。「アキレスは亀に追いつけない。なぜならアキレスが亀との距離を半分つめる間に、亀はその少し先へと動いているからである」という有名なゼノンのパラドックスから始まり、数学者や哲学者を悩ませた「無限」をめぐる議論に自分たちも頭を悩ませました。そして有限集合を無限集合におきかえた時に生じるさまざまなパラドックス、その解決法、さらにその解決法が新たなパラドックスの苗床となることを知りました。

『数学ガールの秘密ノート』では、中学・高校数学のかんどころを学んでいます。テキストは、先生と生徒ではなくて、わざと習熟度の違う生徒同士の対話で書かれています。登場人物が「分かりません！」とすぐに言ってくれるので、読者はそのつどホッとします。むしろこのテキストから学ぶものは、数学の「知識」よりも、「もし自分だったら、分からないという人にどのように説明するだろうか？」という「意識」の方なのかもしれません。

「教えながら学ぶ」と言いますが、この登場人物たちのように、「ねえ、この問題を解いてみるから、聞いてくれる？」とノートや黒板を囲む仲間を作るのもよいかもしれません。アウトプットを意識するとインプット自体もきっと変わってくると思います。



『日本文化論を読む』

担当 栗山 はるな

「日本文化論を読む」という講座タイトルでオイゲン・ヘリゲル『弓と禅』、鈴木大拙『禅と日本文化』の読書会をそれぞれ六週間ずつ開催致しました。日本の身体文化と禅の思想との関わりを中心テーマとしつつも議論はスポーツ論、武道論、教育論に及び、広いながらも濃厚な議論を交わすことができました。当初は中島啓勝氏と講師を一週ずつ交代で、という予定でしたが、フタを開けてみれば議論の楽しさからか毎週二人とも参加している状況で受講の方にとってはお得な授業となったかもしれません。十二週間で二冊の書籍を、しかも後半は『禅と日本文化』を毎週一章ずつ予習してこないといけないうハードメニューとなりましたが受講生のお二人は良く予習して来て下さり、やり取りの中からこちらとしても多くを学ばせていただきました。受講生の方からの企画持ち込み講座ということで春期だけの短い開催となりましたが、受講のお二人ともが講座の内容とご自身の人生や生活とを深く結びつけたものと考えていらっしゃるのが印象的で、生きる「道」としての学問かくあるべし、という実り多い講座を共に作り上げて下さったこと、ここに感謝の意を表したいと思います。有り難うございました。



ここ数年来、小学生高学年向けに「れきし」クラスを開講していましたが、生徒さんが中学生になったのを機に、「歴史」クラスとして再編しました。一冊の教科書を半年から一年かけて精読することで、個々の知識だけでなく、それらの正しい繋がりを意識して歴史に向き合い、さらに現代世界に対する自分なりの問題意識を培うというのが、このクラスの基本的な姿勢です。しかし、授業時間が60分から80分へと増えたこともあって、新たに二つの点に力を入れて授業をするようになりました。



写真は小学生クラスとしてスタートした2016年春の様子

一つは、授業の中で「調べ作業」を実践することです。教科書を読んでいると知らない、あるいは身近ではない地名や概念が登場することがあります。そういう場合は、授業から多少脱線してでも、まずは地球儀や地図帳を使って該当する場所を調べさせたり、年鑑を使って「〇〇の生産量」や「〇〇額のランキング」といった頁をみんなで調べます。私たちは特に疲れている（従って頭を使いたくない）時、既に知っている知識を確かめるために読書をするのがよくあります。けれども、一冊の本からであっても、新しい知識や視点を得るためには、関係する複数の情報を並べて、比較・検討することが重要です。これは中学生はおろか大人でも労を要する作業ですが、みんなでやればお互いの情報や視点を交換しながら効果的かつ楽しくやれるでしょう。受講生の一人は毎回、教室に地図帳と年鑑をもってきてくれるのですが、彼のおかげで以上のことの重要性に改めて気づくことができました。

もう一つは、「言い換え」の練習です。数度に一回、講師とその協力者が日本古典の現代語訳を土台に作ったオリジナル教材をその場で解かせています。問題形式は様々ですが、その多くは傍線部の箇所を一定の条件に従って説明してもらうというものです。一般に他人が書いた文章を身につけようとする場合、(1) 抜き書き（重要箇所をそのまま書き写す）・(2) パラフレーズ（ある箇所の重要な点を別の言葉でまとめる）・(3) コメント（本文全体の主張を短くまとめ、読者自身の考えを批判的に記す）という三つの方式がありますが、ここで問題にしているのは(2)です。教科書を使う回では、一定箇所を生徒さんに正しく音読してもらい、その上で講師が一つひとつの単語や文章について質問し、それに対して生徒は自分の言葉でまとめるよう求められます。「言い換え」練習の回では、この作業を口頭ではなく紙の上で行ってもらいます。（特に母語話者同士が）顔を合わせて行う会話は厳密な言葉遣いをしなくても伝わってしまう（ような気がする）のですが、実際に文字にしてみるとこの「なんとなく」は多くの場合、通用しません（論文を書く講師自身も日々、悩んでいることです！）。この試みが、自分の考えを相手に分かりやすく伝える、つまり「話すように書き、書くように話す」ための訓練になればと考えています。

なお、中学生の「歴史」クラスに加えて、小学生高学年を対象にした「れきし」クラスを新設する予定です。授業の性質上、「ことば」クラスとの同時受講をお勧めします。

2020年4月 新規開講！

・『れきし』 小学5,6年クラス 金曜 19:00~20:00 (予定) 担当 吉川弘晃

日本では小学生から日本の歴史（社会）を学びますが、歴史とはどの科目にもまして不思議と楽しさにあふれる学びです。なぜなら、過去に起きた人間に関わるあらゆるものを物語の形にして自由に考えられるからです。しかし、「自由」といっても、一つだけ重要なルールがあります。それは、物語の一つひとつに証拠を示して相手に理解してもらうことです。クラスでは、日本の歴史を理解するうえで基本的な道具を、国語や算数、理科の知識を引っ張りながら（歴史は知の総合格闘技です）、楽しんで身に付けていきます。

この講座では、マキアヴェッリの『君主論』からスタートし、『ディスコルシ』に進んだ後、途中で理論的な整理をしたいという要望があり、現在は、國分功一郎氏の『近代政治哲学——自然・主権・行政』（ちくま新書）を読んでいます。

古典を読む際、思想史の研究者には、当時の時代状況や、思想家の意図を理解し、時代錯誤的な解釈に陥らないことが求められます。一方で本講座のように、研究のためではなく古典を読む場合、時代も国も違う現代の日本人が読む意義を問わざるをえません。

全ての本は時代の制約を抱えています、ロックの抵抗権の思想が、現代のギリシアで独裁を打倒する際に読まれたように、古典には時代や場所を超えた力があることもまた、否定できないように思われます。ロジェ・シャルチエは、読書とは著者の意図とは異なる誤読や読み替えが繰り返される過程だとしましたが、本講座においても、できるだけコンテクストをふまえながらも、古典がもつであろう力、思いがけない過去と現代の結びつきを、その読解と議論の中で期待したいと考えています。

また、このような古典の普遍的な力に期待するだけでなく、優れた過去の古典を読むことは、現代当たり前のように用いられている言葉や制度をその起源から再検討する機会を与えてくれます。國分氏の著作は主権や民主主義の捉え直しを図る野心的なものです、同じく私たちも古典の読解と議論を通して、現代社会に対して抱く様々な問題関心や疑問を、その起源から問い直す機会にしていければと思います。

『近代政治哲学』を読み終えた後は、ホッブズ、スピノザ、ロック、ルソー、ヒュームと西洋近代思想の古典を実際に読んでいく予定です。関心がある方は、是非ご連絡ください。



● 受講生の声

2019年10月から谷田先生の「西洋近代思想の古典を読む A」を受講しています。受講理由は、経済学を学ぶ上で思想に触れることは不可欠であると感じていたからです。データの科学的分析や高度な数学を用いたモデル化などの工学的手法が今の経済学の主流になっています。ぼくもそのような経済学を大学で学んでいるところですが、その一方で「人間とは何か」という根源的な問いを考える必要があることに気づきました。

自主的に古典を読むのはなかなか骨が折れますが、先生の分かりやすい解説のおかげで難なく読みすすめることができています。疑問点があればすぐに聞くことができ、しかもその先の議論まですることができ、まるで新しい自主ゼミに所属した気分です。これまでにマキャベリ『君主論』（池田廉訳、2018、中央公論新社）と（途中までですが）『ディスコルシ』（永井三明訳、2011、筑摩書房）を読み、思想の流れをいま一度つかむ必要があると感じたので、今は國分功一郎『近代政治哲学：自然・主権・行政』（2015、筑摩書房）を読みすすめています。このように受講生のニーズに答えてくださるのもありがたいです。

いちばん印象に残っているマキャベリズムについて少し書きます。よく危険な思想と言われるマキャベリズムですが、『君主論』を実際に読んでみると、大衆の性質とその扱い方を実にリアリスティックに描いたものであることがわかります。現代の政治の場でもこれに似た思想を感じるときがあります。好き嫌いの単純な感情で反射的に物事に反応するのではなく、思想の中身をまずしっかり理解することの重要性を知りました。

「経済学者は、数学者、歴史家、政治家、哲学者といった才能をある程度ずつ持っていなければならない」と経済学者ケインズは言いました。もっと様々な学問分野に触れる必要があることを認識させてくれる言葉です。その機会を豊富に提供してくれている山の学校に感謝します。（受講生 浅野 望）

この授業は、簡単な英語の文章を読めるようになること、自分の言いたいことを英語で表せるようになることを目的としています。1つ目に関しては簡単な英語で書かれたニュース (News in Levels [<https://www.newsinlevels.com/>] の Level1) を毎回読んでいます。内容が最近のニュースなので文章として英語を読むことができます。またその際にはその音声も聴き、音読もしてもらっています。こうすることで、目と耳と口の3つで英語を吸収することができます。2つ目は自己紹介や長期休暇の思い出などの自由英作文を定期的に行っています。英作文を通してよく使う表現や語彙を確認できますし、何よりも実際に英語を使うのはたのしいです。また、生徒さんの要望に答えて、文法のわからない箇所の復習のためのテストもおこないました。

『高校英語』 A・B 『英語講読』 A・C

担当 浅野 直樹

継続は力なりということを実感した一年でした。

語彙に関して特にそう感じます。一般的に、中学校で期待される語彙の水準と、高校（大学入試）で期待される語彙の水準とは大きな開きがあります。こればかりは数日でどうにかなる問題ではありません。少なくとも数カ月、基本的には数年かけて埋めていくものです。

そのため、単語集を指定して小テストを繰り返す高校も多いことでしょう。最初はできなくて当然なので、どうか少しずつでも語彙を増やしてってもらいたいものです。日常生活や問題演習などで出会った語を単語集で確認するようになれば印象に残りやすいです。

高校生のうちに語彙を増やすという努力を継続すると、センター試験レベルの長文なら意味をつかめるようになります。それは言い換えると、広告やビジネスメール、博物館等での簡単な説明が辞書なしでも大体わかるというレベルです。英検なら2級相当です。ここまで来れば英語への抵抗も少なくなっているのではないのでしょうか。

新聞や専門的な著作を読むにはさらなる飛躍が必要になりますが、それこそ読みたい分野の文章を読み続けて慣れていくしかない世界です。

『英語で味わうシェイクスピアのソネット』

担当 坂本 晃平

この冬に始まったこのクラスでは、今までにシェイクスピアの『ソネット詩集』（大場建治訳、研究社、2018）から1番、18番、85番、130番の詩を読んできました。80分の授業時間でひとつのソネットを読み終えることさえできていない（！）という、かたつむりも真っ青なほどに遅々としたペースです。『ソネット集』には合計154篇のソネットがおさめられているので、読破するには山の学校を毎週無休で開くとしても154週間、これは年にして3年以上も掛かってしまいます。とはいえ『ロミオとジュリエット』に出てくる某神父の‘Wisely and slow, they stumble that run fast.’という金言の通りに、急



いて事を仕損ずることがないように、ゆっくりとじっくりとテキストを読んでこそだと考えています。

さて、毎回のクラスでは文法の解説や意味の把握はもちろんのこと、それぞれの詩における言語表現の特色に

注目していきます。具体的には、詩の中で語られていることと詩のことば遣い、言い換えると内容と形式との相関関係を見ていきます。そしてその際のコツは規則からの逸脱を探すことです。少しだけワザをお見せしましょう。ここでまず、ソネットの規則のひとつに弱強五歩格、つまり弱い音と強い音との繰り返しで5回つづくというものがある、ということをご理解してください。その上で、たとえば85番のソネットの最後の二行連句のうち強い音を太字にして書いてみると、

Then others for the **breath** of words respect,
Me for my **dumb thoughts**, speaking in effect.

だから、彼らの詩は口から出た言葉として遇したまえ、
僕の思いは口には出さねど心で語る愛の真実。(大場訳)



となります。1行目では細字(弱)と太字(強)とが規則通りに5回繰り返されている(五歩格)一方、2行目ではてんでばらばらなのが分かりかと思いますが、これにより1行目ではソネット本来の流れるようなリズムで書かれているのに対し、2行目ではそのとうとうとしたリズムの規則は破壊されていて、言いよんでいるような感じが出ているのです。以上がこの詩の形式的側面です。そこで内容の方に目を転じてみると、85番は上の引用部の翻訳からも分かる通り、「僕は口下手で上手い詩を書けないから黙っているのだけれども、心では他のどの恋敵の詩人たちよりも君を愛しているんだよ」という語り手の詩人の告白がつつらと書かれたものでした。そして驚くべきことに、恋敵である上手な詩人たち(others)について話している1行目は形式面も流麗そのものであるのに対し、自分(me)語りの2行目はどもるような調子です。ここには恋敵の詩人たちのさわやかな弁舌と語り手の詩人自身の口下手さとの、内容ばかりではなく形式にもよっても表現された見事な対比があるのです。

ここからさらに踏み込めば、‘breath’という単語には「発言」(OED 9)という意味ばかりではなく、一般に使われている息=「吐かれた空気」(OED 3)という意味もあります。そして息は吐かれた瞬間に周りの空気と混じわり失われてしまうばかりでなく、軽いものであるというイメージもありますから、上の引用の1行目で歌われている恋敵の詩人の言葉(‘the breath of words’)には儂いもの、ともしれば軽薄なものというイメージが付きまといまいます。この儂い感じ、軽薄な感じは、ある意味1行目の流れるような形式とあっているかもしれません。というのも、1行目の流麗さは規則通りで引っかかる場所がないリズムに由来するのですから。特徴がなくありふれたものは記憶の中ですぐにうつろい忘れられてしまうものです。それに対して、2行目においては語り手の詩人の語られない思い(‘dumb thoughts’)の周辺に強い音が連続することによって、その思いに重さというか内実が与えられている印象を受けますし、リズムの面で破格的であることから1行目よりもよりよく記憶に残ることは明らかです。ここに恋敵の詩人たちと語り手の詩人との間の上下関係の見事な転覆が隠されているのです。他の上手な詩人たちの詩は忘れ去られ、語り手である「下手くそな」詩人の詩は記憶されるでしょう。そしてこのことは実にシェイクスピアが文学史上で成し遂げたことそのものでした。(「僕は詩が下手だから黙っとくもん」とか言っちゃってこんな上手い詩を書くのだから、シェイクスピアはとてども嫌味でひねくれためんどくさい性格の人間だったに違いありませんね！)

閑話休題。上の2行、そして85番全体についてはまだまだ言いたいことがたくさんありますが、全部ここに書いてしまうと商売あがったりなので、ここあたりで筆を納めさせていただきます。とにもかくにも、このような調子でああでもない、こうかもしれないと言いあいながら詩を味わうとなると、そりゃあ80分ではとうてい終わらないなあと思った次第です。

『英語文法をもう一度』

担当 前田 亮太郎

こんにちは。今回「英語文法をはじめからから」という講座を担当しました、京都大学4回生の前田亮太郎です。いち大学生の自分に社会人の方の英語の学び直しの講師に抜擢してくださった山下太郎先生、そして授業の運びの際にたくさんお世話になった梁川先生には感謝を申し上げます。

マンツーマンとなったこの授業、自分が講師という立場でどう社会人の方と授業を作っていけばいいのか模索の中で終わりました。そこで学んだことは僕は教えるというようなことはできないし、しなくてもいいということでした。ペースメーカーとして、また単なる読書会のような気持ちで自分もいち生徒のように一緒に授業をし



ていけばいいと途中で気がつき、気が楽になったとともに毎回楽しくできました。参加してくださった社会人の方の度量に感謝です。

このようにお互いで模索しながら学びの場を作っていくことが山の学校が目指す本来の教育なのかなと思います。そして自由に生徒さんの希望に沿った学びの場が開かれているこの山の学校はとても素晴らしい場だと心から思います。

私もこれからも好きなことを学びつづける人生を送ろうと思います。皆さんもぜひ山の学校をフル活用して、好きなことを思う存分学んでいきましょう！！

『漢文入門』

担当 陳 佑真

漢文入門では、最初に漢文の文法や語法、重要な文字について集中的に解説した後、句読点が入っていない漢文原典の写真をお配りして、読み方を句読点の入る位置から皆さんに考えてきていただく、という方式で学習を進めています。

漢文には元々、レ点、一二点のような返り点はもちろん、句読点もほとんどの場合入っていません（「白文」と呼ばれます）。つまり、学校の古文の教科書では、「学而時習之、不亦説乎」とあれば、「マナビテトキニコレヲナラウ、マタヨロコバシカラズヤ」と読むよう最初から返り点や送り仮名を使って指示されていますが、それはとある誰かの説を採用しただけのことで、本当は漢文の正しい読み方なんていうものは誰も知らないのです。「マナビテトキニコレヲナラウ……」と「正しい読み方」を暗記するのではなく、目の前の文章を自分はどう読むのか、そこから何を感じ取るのか、と模索することに漢文学習の魅力があると私は考えています。一人一人が主体となってテキストに、そして作者に向き合い、漢文の楽しみを感じていただけるような授業を目指しております。

今年度は受講者の方々のご関心に合わせ、王羲之「蘭亭序」、李白「春夜宴桃李園序」のほか、主に唐宋八大家と呼ばれる一群の作家の作品を読んできました（蘇軾「赤壁賦」、王安石「遊褒禪山記」、曾鞏「唐論」、柳宗元「捕蛇者説」など）。本格的な作品を読み進めるのはなかなか難しいことですが、受講者の方々には毎回丹念に辞書を引いて予習して下さっており、堅実にテキストの読解を進めておられます。

学習の際重視しているのは、わからない文字はもちろんのこと、一見簡単な文字についても油断せず調べることです。その作業を地道に繰り返すことによって作者の気持ちに踏み込むことができます。

たとえば、「乃（だい）」という字は「即」や「則」と同様に訓読では「すなわち」と読みますが、今の中国語では「nai3」、「ナーイ」と低く長く伸ばす音で、少しもったいぶるような、また、なんらかの屈折を伴うような語感が含まれます。そして同じ「すなわち」でも、「則」は多くの場合、「これこれという前提条件を満たした場合、



柳宗元「送薛存義序」

などとかだ」という意味で使われますが、時折、「他の誰々はこうこうなのだが、この人はといえばちょっと違うぞ」というニュアンスをもつ場合があります。そういった微細なところに注意することで、一見難しい漢字の羅列である漢文が生き生きとした姿を見せてくれます。

また、内容の豊かな作品を選ぶことはもちろん大切ですが、それと同時に大切にしているのは、テキストにできるだけ「本物」を使おう、ということです。お配りするテキストの多くは中国で作られた木版印刷物のコピーで、中には十二世紀頃に彫られた国宝級のものもあります。大昔の職人さんが筆で文字を書いて、それを木の板に貼って彫り抜き、墨をつけて紙に刷った書物はそれぞれ個性豊かな表情をもっています。二十一世紀を生きる私たちが赤ペンを手を持って、そんなタイムカプセルに点を書き入れるのは、まるで大昔の人たちの文化の営みに自分も一緒に参加するような気持ちになって、とても刺激的です。

古典の名作は丁寧に読むことから何度でも新しい発見が生まれてきます。これからも受講者の皆さんと一緒に、そういった発見をしていけることを願っております。

なお、京都で受講されるのが難しい方よりご要望を頂き、秋学期から Skype を用いた遠隔授業も開始しました。導入前は、果たしてインターネットで漢文の授業ができるのか、色々と不安もありましたが、実際に導入してみると通信品質も良好で、臨場感をもって授業を進めることができいております。

『ドイツ語（初級・講読）』

担当 吉川弘晃

ドイツ語クラスは初級と講読の二つが開講されています。前者は、初めてドイツ語に触れる方、もしくは、文法を最初から復習したい方のための、そして後者は、基礎文法は既に身につけていて文章読解に取り組みたい方のためのクラスです。テキストは文法の教科書から報道記事、学術論文、旅行記まで多種多様なものを扱ってきました。いずれにおいても重視しているのは、まず紙上の一語一語を正しく捉え、次に一文一文を順々に追っついていき、その上で文章全体が伝えるものを理解する方法を身につけることです。

今回は講読クラスでの新しい取り組みについて二つお知らせしましょう。一つ目に重視していることは、教科書に付属した音声教材の活用です。生徒さんのご要望により今年度は、ドイツの原子力問題と反原発運動をテーマにした教科書（大川勇／稲葉瑛志／齋藤治之／ディーター・トラウデン著『原発のない暮らしードイツの選択 Es geht auch ohne Atomkraft!』郁文堂、2018年）を用いております。本書は各課には対話文と論説文が一つずつ収められ、それぞれを朗読した音声は付属 CD に吹き込まれています。授業ではまず最初に、教科書の本文を見ず、頁の下に書かれたキーワードだけを確認してもらった上で、CD を聞きます。次に本文全体を読解していき、どの点が聞き取れていなかったかを確認した上で、シャドーウィングを何度か行い、最終的には音声を聞いて頭の中でドイツ語の原文が再現できるようになるのが理想です。

次に重視しているのは、語彙の学習です。CD を聞いた後、教科書の本文を音読して、その解釈を行います。一文一文をドイツ語から日本語に訳す作業については論説文の方で済ませ、対話文ではあまりその作業を重視しません。そこではむしろ、登場する表現で重要なものを取り上げて、そのコロケーションや関連する語彙とまとめて学習する方法を取ります。例えば、Der Roman ist im Jahr 1968 erschienen.（その長編小説は 1968 年に出版されました）という文が出てきたら、まずは erschienen の文中での働き（動詞 erscheinen「出版される」の過去分詞。この動詞は自動詞なので「sein + 過去分詞」で作る現在完了）を、該当する動詞が不規則変化を取る場合はその三基本形（erscheinen-erschien-erschienen）を答えてもらいます。三基本形については油断せず、その都度、確認していきましょう。次に、erscheinen の類義語をノートに書き出していきます。ざっと思いつくのは veröffentlichen と publizieren（或いは auf-legen。注：分離動詞は間に「-」を入れて表記しています）あたりでしょうか。ここで注意するのは、これらの類義語の共通点と相違点です。（本に限らず何かを）「公にする」という意味合いを帯びている点では以上三つの動詞は同じように使えますが、erscheinen だけは自動詞、それ以外は



他動詞であるという違いに注意せねばなりません。ではもっと幅を広げて「出版」に関する語彙を見ていくと、der Verlag「出版社」、die Auflage「版」、heraus-geben「～を編集する」などなど…。こうやって集めた単語から Bei welchem Verlag ist dieses Buch erschienen? (どの出版社からその本は出たの?) といった作文も可能です。一つのテーマで集めた語彙 der Wortschatz はドイツ語・ネイティブとの会話や通信で実際に使ってみて反応をうかがうのも面白いでしょう。

『フランス語講読』 A・B

担当 渡辺 洋平

フランス語講読 A の授業は、昨年の 6 月から哲学者アンリ・ベルクソン (Henri Bergson 1859-1941) の『意識に直接与えられるものについての試論 *Essai sur les données immédiates de la conscience*』(1889) を読んでいます。日本では『時間と自由』というタイトルでも知られていますが、近年は仏語の原タイトルに即した訳書も出ています。この原稿を書いている 2 月現在で、70 ページほどを読みすすめたところ です。隔週 1 回、80 分×2 コマの授業で、毎回約 5 ページ前後のペースで進んでいます。

山の学校では受講生の希望もあり、この数年はベルクソンの著作を多く読んできました。『精神のエネルギー』(1919) や『思考と動き』(1934) といった論文・講演集に収録された論考からはじめ、2017 年から 19 年にかけては、主著のひとつである『物質と記憶』(1896) を読了しました。現在読んでいる『試論』はベルクソンが 20 代の時に書いた博士論文であり、まさしくベルクソン哲学の出発点となったものです。

さて、『時間と自由』という邦訳名が示すとおり、本書の大きな主題は「時間」と「自由」の問題にあるといっ ていいでしょう。特にベルクソン独自の時間概念である「持続 *durée*」は以後のベルクソン哲学の核をなすものであり、彼の代名詞とも言うべきものです。

われわれは普段、時間というものをどのように考えているのでしょうか。おそらく多くの人が、過去から未来へと伸びる一本の直線のようにイメージするのではないのでしょうか。しかしベルクソンによれば、こうした時間の表象は不純なものだということになります。直線というイメージからしてすでに、時間とは異なるはずの空間から由来する性質が入りこんでしまっているからです。

ベルクソンが考える時間、すなわち「持続」とは、われわれの意識状態のように刻一刻と不断に変化し続ける時間であり、したがって異質性をその性質としています。退屈な時間は流れるのが遅く感じられ、楽しい時間はあつという間に過ぎ去るように、時間は決して等質的なものではないのです。この意味で、持続は「質的多様性」とも呼ばれるのですが、先程の直線のイメージではこうした質のありようを捉えることはできません。

人間の意識的な事象は空間内の物体のように明確に区別することはできません。怒りであれ、悲しみであれ、ひとつのかたまりとしてきっぱりと切り分けることはできないのです。ベルクソンの持続の概念は、こうしたこころのありようを捉えるために生み出されたものでした。私たちのこころの出来事は相互に浸透し合っており、明確な輪郭を持ちません。しかしいくつもの出来事が連鎖することで、ひとつひとつの音が有機的に組み合わせられることでメロディーが生み出されるように、時間がかたちづられていくのです。

ではこうした持続のありようは自由の問題とどう関わるのでしょうか。これは『試論』の最終章である第 3 章のテーマであり、また次号で書いてみたいと思います。

なお、きちんと精査したわけではありませんが、岩波文庫版の『時間と自由』にはかなりの誤りが含まれており、訳書で読む場合には注意が必要です。

フランス語講読 B のクラスは、昨年から引き続き休講中です。もしフランス語の原文で読んでみたい本や文章がある場合、ご気軽にお問い合わせください。ジャンルや難易度は問いません。



『初級フランス語文法』 A・B 担当 谷田利文

両講座とも、『0 から 1 へのフランス語入門』というフランス語をゼロから始める方のための講座に関して連絡をいただき、その後、受講される方の要望に沿った形で新たに作った講座になります。

A では、一通り文法の学習は終わったものの、その定着度を確かめる練習が足りない、そして多忙なため予習・復習の時間をとるのが難しいということでしたので、練習問題が多いテキストを選び、講座の時間内で解いてもらうという形をとっています。80 分間、練習問題に向き合うのはハードだと思いますが、トライ & エラーによって、文法知識の定着度を明らかにし、それを克服する過程を楽しんでいただいているように見えます。

また B では、複数人の講座では、他の方に遠慮して自由に質問ができない、自分のペースで理解できないという要望から、一対一で理解度を確かめながら、じっくりと文法の学習を行う形式をとっています。自分が学んだ際に、暗記するものとして通り過ぎてしまった事項等に疑問を示されることがあり、それに答えるために、こちら側も改めて勉強させていただき、フランス語を学ぶ楽しさを再認識している状態です。

両講座とも、ある程度フランス語の学習をされた方向けのものですが、新しく始める方への『0 から 1 へのフランス語入門』も引き続き募集をしております。少人数制の利点を生かして、受講される方の学習状況や要望に沿ったオーダーメイドの講座を新しく作ることもできますので、関心がある方は、お気軽にご連絡ください。

『現代ギリシャ語』 担当 福田耕佑

昨年、現代ギリシャ語の授業が開講しました！ ギリシャ文字の書き方と発音から始めて、これまでで基本的な日常の表現や、ギリシャ語の中で最も基本となる ω 動詞の現在形活用まで学びました。It's Greek to me とはよく言ったもので、ギリシャ語の文法は一筋縄では身に付きません。この授業では復習を大切にしており、ゆっくりではあっても省略することなく文法事項を解説し、毎回の確認問題を通してしっかり定着するまで復復しています。

現代の日本語と平安時代の日本語が異なるように、現代のギリシャ語と古代のギリシャ語にはもちろん差異があります。とはいってもギリシャ語はギリシャ語であって、古典ギリシャ語は今でも会話や文章の中で私たちの舌と指を通して日常の中に生き続けています。このような古典ギリシャ語と現代ギリシャ語の繋がりを感じてもらうために、この授業は現代ギリシャ語の授業ではありますが、古典語と現代語の比較や街角で見られる古典ギリシャ語の表現なども積極的に紹介しています。文法の学習が終われば、現代ギリシャ語クラスでも古典「現代ギリシャ文学」の作品を読みたいと考えています。

この授業は講師の福田が現在留学しているテッサロニキから Skype を用いて行われています。生の授業とは違う難しさもありますが、ギリシャから日本にギリシャ語を届けられるという不思議な機会をいただいております。ひょっとすると、Skype を通してギリシャ人が現れるかもしれません。この授業を通して古代から現代まで続くギリシャ語の魅力と、豊饒なギリシャ文学や哲学の魅力をみなさまと共有できれば私にとって望外の喜びです。



「1~3 テッサロニキの風景（福田撮影）。1 アリストテレス広場（アリストテレスの活用が古典語風）。2 アリストテレス像（発音はアリストテリス）。3 凱旋門。4 ギリシアにおける出版記念講演会、登壇の様子。書籍（論集）名は『ニコス・カザンザキスと極東の眼差し（Ο Νίκος Καζαντζάκης απο-ανατολική ματιά）』」

『イタリア語入門』『イタリア語講読』

担当 柱本 元彦

ゼロからのイタリア語クラスと講読クラスを担当しています。山の学校ではこれまでイタリア語クラスをゼロから開始したことはありませんでした。初体験なわけで受講生の意向に全面的にあわせるつもりでしたが、フランス語など学ばれた方々でもあり、思いもなかったほど早く超特急的に進めております。わたしのほうは、半分忘れていたフランス語の文法書をちらちら眺めながら、あちらこちらイタリア語と異なるのを見つけては喜んでます。ただそろそろ語彙の記憶が追いついてこないのではないかと、それだけが心配です。使用している教科書は、大学で週一回のイタリア語授業なら二年かかるものなのですが、この調子でいけば冬季の三か月で文法を一通り終えることができそうです。講読クラスのほうは引きつづきステファノ・ベンニの『プレンドイルーナ』を読んでいます。現代作家らしいベンニの語り口にも慣れてきたようで、冬季からはただ一人の受講生として残られた方も（講読クラス存亡の危機です）楽しそうに読み進めていらっしやいます。半分ほど終えたところですが、面白いなあ、いったいどうなるのだろう・・・てな風でいるうちに終了しようかな（つまり今季いっぱい）と考えています。オチまで見ない方がいいという小説もありますからね。



『ロシア語講読』

担当 山下 大吾

この一年間の当クラスは、以前と引き続き、基本的に Gleb Struve 編集のロシア語読本に収録されている短編を読み続けております。その内容はドストエフスキの『ボボク』、トルストイの『三人の隠者』、レスコフの『補綴工』、チャーホフの『眠い』と続いてきましたが、19世紀の主要作家として欠かすことのできないレールモントフの作品が未収録でしたので（Struve 自身は読本の序文でその理由を明らかにしています）、彼の代表作である『現代の英雄』所収の一篇で、鷗外も『ぬけうり』の邦題で独訳から重訳していることで知られる『タマーニ』を補足として読み終えたのが丁度昨年末でした。この1月からは読本の作品に戻って、ソログープの『囚われの身』を読み進めております。受講生はTさんが通年で、Nさんが主にトルストイ講読時にご参加下さいました。Tさんの一コマ80分間で読むテキストの量は、読みの精度はそのままあるいはそれ以上となりながらも、以前と比べ格段に増えてきたようです。

墓の中で朽ち果てていく死者達が、生前そのままの強烈な個性を發揮しながら、それらに相応しいどぎついほどの口調でストーリーが展開していく怪奇な『ボボク』、生粋のロシア人にも拘らず、なぜかフランス風の名前を看板に掲げている商人がその理由を物語る『補綴工』など、選りすぐりの作品だけにそれぞれ面白く興味深い作品でしたが、その中でも『三人の隠者』が特に印象に残っています。

トルストイと言えば第一に挙げられる『戦争と平和』や『アンナ・カレーニナ』などの長編の重厚な世界とは対照的な、彼のいわゆる「転向」後の作品に属するものですが、北ロシアに伝わる伝承を基に、真の信仰の姿が、一読してまざまざと目に浮かび上がる小品です。その効果を高めている要因の一つは明らかに簡明率直な文体で、読本の中であくの強い『ボボク』の直後に配置されていることは、単なる年代的順序を超えた編者の意図が感じられるように思われます。



トルストイ肖像画（イリヤ・レーピン）

『ラテン語初級文法』『ラテン語初級講読』A・B・C

『ギリシャ語初級文法』B

担当 山下 大吾

初級文法クラスは、従来通り岩波書店刊行の田中利光著『ラテン語初歩 改訂版』を教科書として用い、一学期制の速習コースが春学期に開講され、昨年9月開講の二学期制の通常コースが現在終盤を迎えております。いずれも受講生は通いの方のみならず、Skypeを通じて参加される形態の授業となりました。講師としてもこのような授業は初めての経験ですが、従来授業後の雑談などで対応していた細かな点に関してはメールを通して対処するなど不備のなきよう努め、これまでの所順調に経過しております。



講読Aクラスではキケローの『友情について』を春学期に無事読了しました。受講生Cuさんにとっては姉妹篇ともいえる『老年について』に続いての読了となり、以前にもまして自信を深められたようです。その後のテキストは、以前ギリシャ語初級文法を修了されたCuさんのご希望に沿い、ホメーロスの『イーリアス』一歌を冒頭から読み進めております。247行以下「蜜より甘い語り手ネストール」の件では、『老年について』31節のラテン語と見事にリンクする楽しみを味わうことが出来ました。このほかギリシャ語初級文法Bクラスがこの1月から、Skype経由の方々を含め三名の受講生を迎えて新たに開講しております。

Bクラスではウェルギリウスの『牧歌』を読了後『農耕詩』へと移り、現在二歌を講読中です。受講生は引き続きCaさんお一方、本文のみならず註釈にもしっかり目を通され、授業進行の上で有難く感じております。一篇ごとの纏まりがコンパクトな『牧歌』と比べ、作品の規模が大きく、あまり馴染みのない土壌や気候、ブドウ栽培などが主題となる『農耕詩』は矢張り難しい印象ですが、それだけに各所で幾度も反芻を迫られます。撰文集などでも抜粋して読まれることの多い「イタリア賛歌」(2.136-176)の最終行では、先行者ヘーシオドスに対する敬意のみならず、ウェルギリウス自身の将来の姿もかいま見え、交錯しているようです。

Cクラスではキケローの『老年について』を読み進めております。受講生は各学期それぞれで入れ替わりがありました。現在は春学期に初級文法クラスを修了されたTさんお一方がSkype経由で参加されています。9月に作品冒頭から読み始め、1月末現在で26節まで進みました。開始当初は初級文法での規模に比べ格段に長い文章に戸惑われていた様子でしたが、現在は註釈で取り上げられていた修辞上の技術にも注目し、それらを独自に見出そうとする姿勢も出てこられたようです。キケローの文章はそのようなテクニックの宝庫とも言えるものですので、文法的把握や内容確認を踏まえた上で、関心の幅を更に広げて頂ければと期待しております。

2020年4月、新規開講クラスのご紹介

この機会をどうぞお見逃しなく！

● 『新約ギリシャ語講読』 月曜 18:40～20:00 予定 担当 広川直幸

「ヨハネの福音書」を初めから読む授業です。古典ギリシャ語の初歩を学び終えて、いくらか原典を読んだことがある方が対象です。古典ギリシャ語から新約ギリシャ語(コイネー)へのギリシャ語の歴史的变化を押さえながら、「ヨハネの福音書」をすべて読むことを目指します。どうぞお問い合わせ下さい。

● 『ギリシャ語初級講読B』 新規開講につき時間未定。 担当 竹下哲文

古典ギリシャ語の文法を一通り学び終えた方を対象に、平易な読み物から始めて、基本文法を確認しながら進んでいくクラスです。古典ギリシャ語がどのように言葉を連ねてゆく言語なのか、英語などとは異なる語順のしくみはどうなっているのかといった問題を、文章を読みながら考えてゆくことになるかと思ひます。関心を持たれる方は、ぜひお問い合わせください。(テキスト:A.E. Hillard & C.G. Botting, Elementary Greek Translation, Bristol Classical Press 1982)

『ギリシャ語初級』

『ラテン語初級』

『ギリシャ語中級』 A・B

『ラテン語中級』 A・B

『ギリシャ語上級』 A・B

『ラテン語上級』

担当 広川直幸

今年度は大体昨年度と同じ授業を開講したが、ラテン語初級は申し込みがなかったので開講していない。また、ギリシャ語初級は通常のクラス授業ではなく、秋田から京都まで通ってくる受講生のために月に一回開講するという特別な形を取っている。まだ二月になったばかりで、年度末まで半学期分の授業が残っているが、それぞれのクラスの現在の状況を列挙すると、ギリシャ語初級は教科書(*Thrasymachus*)の初めのほうを学んでいる。ギリシャ語中級 A は相変わらず A. L. Barbour, *Selections from Herodotus* をテキストにしてヘーロドトスを読んでいる。ギリシャ語中級 B ではアリストパネースの『リューストラター』を読んでおり、一回に 40 行程度というよいペースで進んでいるので、今学期中には終わりそうである。『リューストラター』が終わったら、すぐにプラトンの『饗宴』を読み始めることになっている。ギリシャ語上級 A は引き続きアイスキュロスの『救いを求める女たち』を校訂上の問題を検討しながら少しずつ読んでいる。ギリシャ語上級 B はエウリーピデースの『バツカイ』を校訂上の問題よりは文法上の問題を注意深く検討しながら読んでいる。これには理由があって、Rijksbaron の非常に刺激的な文法的註釈が出版されているからである。

ラテン語中級 A はプラウトゥスの『捕虜』を読んでいる。『捕虜』は幸い新しいサルシーナ版が出ているので、それをテキストにしている。ラテン語中級 B は引き続きオウィディウスの『変身物語』を一回に 40 行程度のペースで読み進めている。ラテン語上級は授業休止期間を挟みながらも相変わらずプラウトゥスの『アンピトゥルオー』を少しずつ読んでいる。

それぞれの授業の進捗については、学期末から学期初めの期間にインターネット上のホームページの情報を更新しているので、そちらを参照していただきたい。

さて、受講生に向けて一般的なアドバイスを書こうと思い、昨年原稿を読み返したところ、書こうと思ったことと同じことが書いてあった。と言うことは、全く改善されていないということなので、今年はずっと具体的に同じアドバイスをしようと思う。

発音の大切さについては、折に触れて述べてきたが、全員に特別上手い発音を求めている訳ではない。可能な人は感情を込めた流暢な発音を目指して練習するべきであるが、そうでない人に求めているのは、聞いて分かる程度の発音であり、もっと言ってしまえば、発音している本人が自分が何を言っているのか分かる発音である。復元された発音を用いて古典語を学ぶ場合、模範になる母語話者がいないのであるから、妥当とされる復元音に従って、書いてある文字を発音すればよい。ただそれだけのことである。

ただそれだけのことと書いたが、これが出来れば 2000 年も前に書かれた古典の音の美しさがある程度今でも味わうことができるのである。一般的に言って、ギリシャ・ローマの古典は黙読の対象ではなく、演じたり音読したりして耳で聞くために書かれたものである。そのようなものを、発音はよく分からないが、何とか解読できるものとして扱うのは非常にもったいない。おいしい料理を目の前にして、食材や調理法は分析するが、実際に食べるはしないのと同じことである。

具体的なアドバイスは、音読する習慣をつけるべしということに尽きる。周りに人がいるところで勉強しているので音読ができないというのなら、内語で(心の中で)音読すればよい。予習の際にもなるべく音読するのがよいと思うが、分からないこと(当然母音の長短を含む)を調べることに手一杯でなかなか実行できないだろうから、予習の段階の音読は予習の最後の仕上げとして行うぐらいでよいだろう。それよりも、授業で疑問点が解決して内容が分かるようになった後で、その部分を繰り返し音読するのが効果的である。授業の復習をしている人は、おそらくあまりいないのではなからうかと思うが、予習よりは復習のほうがはるかに実りがあるので、復習として音読を行うことを強く勧める。

『ギリシャ語初級文法』 A

担当 堀川 宏



このクラスでは昨年四月から、古典ギリシャ語の初級文法を学んできました。アルファベット ($\alpha, \beta, \gamma \dots$) の読み方から始めて、名詞や動詞の語形変化 (屈折) を中心に学習を進めています。はじめから文法の細則に眼を向けるのはよくないので、まずはこの言語を動かすしくみを大きく捉えることを目標にして、学んだ文法事項を練習課題で身につけるという方針をとっています。なかなか厄介な言語なので定着度はまだまだかと思いますが、練習を続けていれば少しずつできることが増えてきます。受講生は試しに四月頃の練習課題に再挑戦してみると、自身の成長を感じられるのではないかと思います。

受講生のなかには Skype を通して遠方から参加してくださっている方もいます。このような形での授業は私にとって初めての経験だったのですが、離れた場所からの授業参加ができることの持つ可能性について、しばしば考えながらの一年でした。古典ギリシャ語を学びたいと思っても、近くに教室があるとは限りません (ない方が多いかと思います)。それで入門書や教科書などを使って勉強することになりますが、進めてゆくといくつも疑問点が出てくるはず (勉強とはそういうものです)。そういった疑問点は数が少ないうちは「そのうちに解決しよう」と思えるものですが、積み重なってゆくうちに「分からない」という感覚に繋がってゆきます。そのような状態にある方には、山の学校の Skype 授業を強くお勧めします。どんな些細なことでもよいのですが、ひとつの疑問が解決することが、学んでいる言語の見通しをよくします。ひとつの疑問解決は、次の疑問解決へと繋がります。そのような体験をできる場所が教室ですから、それが Skype によって空間的な制約から解き放たれることに、大きな可能性を感じています。

今学期で文法をひと通り学び終えて、四月からは新たな講師のもと、基本文法を確認しながら平易な読み物を読むでゆくこととなります。古典ギリシャ語がどのように言葉を連ねてゆく言語なのか、英語などとは異なる語順のしくみはどうなっているのかといった問題を、文章を読みながら考えてゆくことになるかと思います。関心を持たれる方は、ぜひお問い合わせください。



『将棋教室』

担当 中谷 勇哉

毎回生徒同士を二局、指導対局 (駒落ち) を二局程度の割合でやっています。2 人とも少しずつ攻めの力が上がってきて、現在は四枚落ち (飛車・角行・香車を落とす) でこちらが時折負かされることも出てきました。あとは逆転を許さないような守りや受けの力が身につけば、二枚落ちで指す日も近いといったところです。

攻めもそうなのですが、守りは特に「型 (形)」を覚えることが重要です。「囲い」を覚えることはもちろんなのですが、攻め込まれたときの受けにも型があり、将棋が上達するというのかなりの部分が、この型が直感的に見えるようになることを意味します。この学習にはテスト勉強などと同じく、復習 (検討)、類題を解く (意識して対局)、正答を見る (プロの対局を見る) といったことが効果的です。また、詳しくは脱線するので書きませんが、実は人工知能も似たような経路で型を学習しているようです。将棋だけでなく学習にも型があるということでしょうか。そうだとすれば、将棋の上達がその後の学習につながるように教えていければと思っています。



▲写真はイベント「将棋道場」トーナメント

今年度は『つくる1年』、『つくる2~3年』をそれぞれ開講しております。

春・秋・冬学期の中で、材料や道具に触れてもらう機会についてある程度予定を立てていますが、その時々
の受講生の雰囲気を見て、各自のペースで作品づくりに取り組んでいます。家で途中まで取り組んだものの
続きをする子もいれば、好きなもの、将来の夢に関連したものをつくる子もいました。設計図や説明書が無
い中で作業することも多く、受講生にとって大きな負担となったかもしれませんが、出来上がった作品で楽
しむ姿や、好きなものについて語るときのいきいきとした姿は特に印象的でした。

私が講師として『つくる』を担当してまもなく3年が経ちますが、受講生の皆さんの様々な取り組み、独
特な着眼点をうまく共有することの難しさを日々痛感しています。ただ、『つくる』では、受講生が様々な材
料や道具に触れながら作品を完成させることと共に、その過程で考えたり悩んだりすることもまた重要な経
験であると考えています。また、他の受講生の作品が出来上がるまでの過程を見ることができると、受講
生自身が思いつかなかったような工夫に触れることができる貴重な機会でもあります。作品をより良くする
ヒントを得るきっかけは様々ですが、受講生の皆さんがそのようなきっかけを見逃さないよう支えていき
たいと思います。



『ひねもす』（つくる4～6年） 担当 福西 亮馬



このクラスでは、「ひねもす工作」に毎回取り組んでいます。それは、写真のように（異なる太さの）紙パイプを、穴をあけて組み立てる、「ブロックに似た造形」です。ただし、ブロックに当たる部品はすべて自分で加工して作ります。

まず使うのは、はさみです。それで紙パイプを好きな長さに調整します。次に、穴あけパンチです。それで穴をあけたパイプに別のパイプを通して、十字や回転軸の構造を得ます。

「切る」と「穴をあける」。基本はその二つです。シンプルだからこそ、余計な制約なしにとことんまで改良できます。

とは言っても、「ひねもす工作って何？」という最初のころは、何が作れるのか自体が分からなかったと思います。そこで、こういう技を使ったら、こういうものが期待できるよという見本を示しながら、取り組んでもらいました。そうするうちに、次第に作品の幅が広がっていきました。

工程をすべて頭に入れながら、自力でやり遂げることの手ごたえ。それを、受講生たちには毎回楽しみにしてもらえるよう、私も切り口を工夫し続けたいと思います。

しぜんクラスで子どもたちと過ごしているとき、いつの間にか、太古の人々の暮らしのことが想起され、みんなの活動の様子と重なったり、対話の種になったりすることがあります。

何故かと言うと、例えば、森の中で鹿の糞を発見したり、猟師さんが「くくり罠」を仕掛けている注意書きが目に入ったりすると、自ずと狩猟の話になり、東北の「マタギ」など、古来の狩猟文化が今も生きているという話題になります。或いは小さな焚き火をみんなですぐ囲むとき、かつては毎日のようにこうして火を囲む生活があったことをみんなにも想像してもらいます。

もうひとつの理由として、私自身が数年前、東北地方に出土の多い火焰型土器を中心とした縄文土器の展覧会をみて、胸が震えるほど感動した体験があります。以来、それらをどのようにクラスで伝えられるか、漠然と考えながら過ごしてきました。

そこで今年度後半には、「縄文人の暮らし」というキーワードがクラス中に散りばめられました。今よりもずっと、自然と直結するような濃密な関係にあった人々、世界観なのですから、「しぜん」クラスとしては、自ずと行き着くテーマであるとも言えます。当時の人々が何を考えどんな暮らしをしていたかは考古学に基づいた推論の域を出ませんが、いかに豊かな文化であったかは土器を見れば一目瞭然ですし、それらについて「想像力」を働かせ、今と照らし合わせることには、大きな意味があると思います。様々な自然の事物と対面し、子どもたちは想像力を働かせることが大好きですし、あらゆる自然の事物を象徴化、神話化して捉えていた縄文人と、響き合うところがあると思います。

勿論、そのように私が無理矢理子どもたちの活動を意味づけるまでもなく、子どもたちから自ずと発せられる活動の事例をご覧頂ければ、その一つひとつに、いかに大きな発見や喜びがあるか、十分にご想像頂けるのではないかと思います。

裸足の大冒険

「今日は沢へいこうよ」というFちゃんの一言が、その日のクラスを決定づけました。男の子たちもにっこりして、賛同します。Fちゃんがおもむろに玄関で靴下を脱ぎ、裸足になって教室を飛び出すと、男の子たちも裸足になって続きました。石段を上り、森の土を踏みしめて進み、アスファルトで舗装された脇道を進むと、またその脇に沢へ続く黒々とした土の道が続きます。

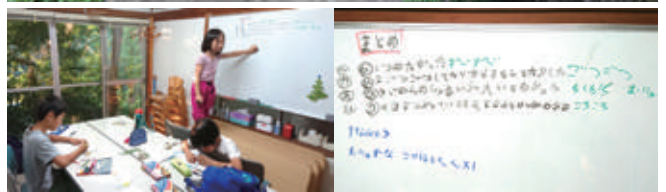
沢に着いたところで私も裸足になって、3人のあとに続きました。「気持ちいい!」「イテテテ…」口々に足裏の感触を確かめながら、湿った砂土の上を、冷たい水の中を、どんどん進みます。

日溜まりのある場所に辿り着くと、沢のほとりに出来たサラサラした砂山を見つけ、繰り返して登っては滑り降りました。

帰り道も勿論裸足です(何しろみんなの靴は、玄関にあるのですから)。教室へ戻ると、足の裏で感じた地面についての「まとめ」が率先して行われました。地面がこんなに色々な表情をしているなんて、おそらく靴を履いている限り分からないのではないかと驚くほどです。クラスが終わり、保護者の方がお迎え下さる石段の下まで、みんなも私もニンマリしながら裸足で降りていきました。また、「大地との対話」をしましょう。



『縄文時代の人びと』(江坂輝彌 監修、佐々木マキ 絵、ほるぷ出版)



火を囲み、食べる

クラスでは「山の恵み」を頂くことがあります。4～5月には自生する筍を掘らせてもらったり、梅の実を採取して梅ジュースを仕込んだりします。今年度、中でも印象的だったのは、石段の周りで見つかるむかごを集めて茹でたり、焚き火で蒸し焼きにして食べたことです。また、山の学校の前に生えている夏みかんの実を、虫取り網や鋸を駆使して採取し、味わったりもしました。

こちらで買ってきたものではありませんが、焚き火でジャガイモを焼いた日には、最初「ジャガイモは苦手で食べられない」とっていた女の子が、「美味しい！」と言って食べてくれました。

芋といえば焚き火で焼くものの代表格で、寒くなると毎年のように行っていました。あるクラスで「自分たちで何か栽培できないか」と提案があり、レモンの苗、芽の出たしまった男爵芋などを、秋の終わり、校舎の隅に植えました。山で枯れそうになっていたクサイチゴの苗も採取してきて傍に植えてみました。縄文人も、ドングリやクリなど、身近な植物を採集するだけでなく、自分たちで植えて増やし、活用していたそうです。



穴を掘ってみたら

虫食いの穴が沢山空いたような朽木を見つけると、その中を調べたくて、スコップで何かいないかとほじくる姿をよくみかけます。子どもたちは、飽きずに延々と朽木を掘り続けます。

また、あるときは、木の根っこと地面との間に拳大くらいの穴が覗いているのを見つけ、「何かの巣かな」「どこまで続いているのかな」といって、スコップで穴の奥の土を掻き出し始めました。そのうち、穴を掘ること自体が楽しくなったようで、脇の地面を掘り始めました。谷間の斜面の土は、とてもさらさらとしていて、宝物のようにビニールに入れて持ち帰る人もいました。

そこで、別の日、絵本『あな』（谷川俊太郎作、和田誠画／福音館書店）を森の中で朗読しました。主人公の男の子が、ただ延々と穴を掘り、最後に埋め戻すという話です。読み終わると、果たして、ここそこで穴掘りが始まりました。



落ち葉をどけると、真っ黒な土。いつも活動している森の広場ですが、掘ってみるととても硬いことが分かります。それでも負けじとスコップを突き立て掘り進めると、突然土の色が、鮮やかな黄土色に変わってきました。シャリッという音がして、幾分ほり易く、しかも手で捏ねてみると粘り気があり、ぎゅっと詰まった綺麗な泥団子が出来ます。

偶然の嬉しい発見を今後も発展させ「自然の粘土」による土器づくりに、みんなで挑戦できれば楽しいのではないかと考えています。

これらの他にも、例によって「ひみつ基地」作りをしたり、また、弓矢を作ったり、「お山の生き物図鑑」を作るのではないかと生き物の観察記録をしたり、色々な取り組みをしました。

秋にはきのこ探しもしましたが、「きのこは嫌い」というT君が、「あ！これは図鑑でしか見たことがなかった〇〇タケだ！」と、人一倍詳しく、また歓声をあげていたことが印象的でした。

また、谷底に台風で横たわった大木から無数に新芽が出ていて、R君が「僕この木大好き、木さん頑張れ！また会いに来るね」と友達のように話しかける姿もありました。

自然の草花や生き物は、ちょっと不気味だけど、面白かったり、よく見ると可愛かったり、遅しかったりします。そのようにして、これからも「自然のものたち」に対する畏敬の念が育まれることを期待しています。



『かいが』 A・B

担当 梁川 健哲

例年のように、子どもたちからの「やってみたい！」という提案を大切にしながら、それぞれの課題制作を見守っています。また、インスタントカメラを用いて構図にこだわったり、「絵にしか出来ないこと、写真にしか出来ないこと」についてそれぞれ考える課題や、音楽を聴いて、音そのものを可視化する「音楽を描こう」など、過去に何度か行ってきた課題をまたしたいというリクエストを受けることもあります。

同じ一つの課題でも、繰り返し探求してみたいと感じてもらえるのであれば、それは喜ばしいことです。静物画で何か特定のモチーフに向き合う場合も同じです。例えば、繰り返し「薔薇を描きたい」と言う女の子がいました。気になったものは、何度描いてもよいと思います。山の学校では読書、殊に「精読」に重きを置いています。絵画で例えるならば、何度も同じモチーフと対話を繰り返し、或いは何度も同じ技法を繰り返し、その度に新しい発見をするようなものです（そして、その発見は永遠に尽きることが無いでしょう）。

このようにして、何事に対してでも、「初めて見るもののように見る」ことができれば、世界はもっともっと美しく輝くことでしょう。何を探求するか、入り口はどんなことでもいいのです。そうした感性を、クラスの皆さんには育んでもらいたいと思っています。



「音楽を描く」課題では、電子音楽やバンドネオンの音色など、ちょっと変わった音に「目を凝らして」もらい、音の色や形を次々と追いかけていきました。画用紙の上に音楽が録音されていくような、再生されていくような面白さがあります。皆さんもチャレンジしてみてください。



榎の実をすり潰すと、とても濃くて鮮やかな紫色の汁が出ることを、ある園児が教えてくれました。そのことを、かいがクラスでも紹介させて頂きました。かつて、道具も絵の具も、全てを屋外の自然の中から見つけて制作する課題をしたことがあります。しぜんクラスの記事でも「粘土」の話をしました。自然の素材を使う課題には、まだまだ発展の余地があり、今後取り入れていきたいと思ひます。

園庭を大きなキャンパスに見立てて、木の枝や落ち葉で描く取り組みも、この一つと言えるでしょう。



上の4枚は生徒作品。自分がいいと思ったお友達の作品に付箋を貼ったり、コメントを書き添えたりしていきます。



カメラを使った課題では、みんなが撮った写真を広げた品評会や、考察が繰り広げられました。どうすれば面白い「画づくり」ができるか考える点では、写真も絵画も同じですが、改めて、それぞれにしかない良さがあると気づいたのではないのでしょうか。



これらの他にも、ひたすらスケッチブックに向き合い空想を広げたり、じっとしてはくれないカマキリを何とか捉えようとスケッチしたり、憧れの「ゴッホ風」、「ピカソ風」表現を試みたり、版画の多色刷りに挑戦したり、実に色々な取り組みがありました。このように、それぞれの実験精神を尊重し、思う存分試行錯誤の出来る場であり続けたいと思ひます。



異動のお知らせ

長きに渡りご指導下さいまして、誠に有難うございました。新天地でのご活躍を心よりお祈り申し上げます。(以下、順不同、敬称略)

- **堀川 宏** 担当:「新約ギリシャ語初級」「ギリシャ語初級文法A」(2014年12月～2020年3月) **クラス便り p.21**
京都大学他非常勤講師(～2020年3月)、獨協大学国際教養学部講師(2020年4月～)
- **山下 あや** 担当:イベント「英語特講」(～2020年3月)
立命館大学、佛教大学、京都女子大学非常勤講師(～2020年3月)、愛知学院大学教養学部講師(2020年4月～)。
「山の学校での経験を生かして、学生の「学びたい」という気持ちに寄り添う教員を目指したいと思います。」
- **中森 弘樹** 担当:イベント「オセロ教室」(2011年8月～2019年3月)
京都大学総合人間学部非常勤講師(～2019年3月)、立教大学21世紀社会デザイン研究科助教(2019年4月～)。
「オセロを通じて山の学校と、そして子供たちと触れ合えたことはかけがえのない経験になりました。有り難うございました。」
- **前田 亮太郎** 担当:「英語文法をもう一度」(2019年9月～12月) **クラス便り p.14**
京都大学法学部4回生、京都大学体育会硬式野球部 副主将(～2020年3月)、一般企業就職(2020年4月～)。

新任講師のご紹介

2019年度4月以降に着任された先生、2020年度より着任される先生ご紹介致します。(以下、順不同、敬称略)

- **入角 晃太郎** 担当:「数学を哲学する」担当(2019年11月～) **クラス便り p.8**
京都大学理学部卒業後、学部を変えて再入学、京都大学総合人間学部在学中(～2020年3月)。
同大学院人間環境学研究科人間存在論修士課程1年(2020年4月～)。
- **栗山 はるな** 担当:「日本文化論を読む」担当(2019年4月～) **クラス便り p.9**
京都大学人間・環境学研究所後期博士課程在学中。関西国際大学非常勤講師(2020年4月～)。
- **坂本 晃平** 担当:「英語で味わうシェイクスピアのソネット」「ことば1年」「かず1～2年」担当(2019年11月～)
京都大学大学院文学研究科修士課程在学中。専門はイギリス・ルネサンスの文学。 **クラス便り p.3, 12**
- **下村 識** 担当:イベント「オセロ教室」担当(2019年4月～)
日本オセロ連盟五段、公認指導員。関西選手権2018優勝。大阪竜星戦2019優勝。京都大学経済学部在学中。
- **竹下 哲文** 担当:「ギリシャ語初級講読」担当(2020年4月～新規開講) **p.21 ギリシャ語初級文法の続きのクラスです。**
京都大学大学院文学研究科博士後期課程(～2020年3月)。京都大学非常勤講師、専門は西洋古典(2020年4月～)。
- **谷田 利文** 担当:「西洋近代思想の古典を読む」「初級フランス語(文法)」担当(2019年9月～) **クラス便り p.11, 17**
大阪市立大学研究員。専門は近世フランスの思想史。
- **中村 安里** 担当:「ことば4～5年」「かず3～4年」「英語講読」(2020年4月～予定)
福井大学医学部医学科卒業(2019年3月)、京都大学思修館(2020年4月～)
- **福田 耕佑** 担当:「現代ギリシャ語」担当(2019年5月～) **クラス便り p.17**
京都大学大学院文学研究科二十世紀学専修・博士課程在学中。主に現代ギリシャ文学を研究。

● ラテン語講習会のご案内

ラテン語は独習に向いています。ラテン語を楽しく独習するコツをお伝えするのがこの講習会のねらいです。「東京に山の学校があればありがたい」というお声をきっかけにラテン語の出張講習会を始めました。予想を超えるお申し込みと受講生の熱気に押される形で、以来月に一度の割合で東京、名古屋、京都で講習会を行なっています。京都で開くのは、毎週山の学校に通えない方のニーズに応えるためです。

参加者は山の学校と同じく学生、主婦、会社員、教員、退職したシニアなど様々です。「すべての道はラテン語に通ず」と言いたくなるほど、動機こそ違えどもラテン語に対する熱い思いを共有する点でみな同じです。

文法のクラスに加え、講読のクラスもご用意し、キケロー、ウェルギリウス、セネカ、カエサル の作品を読んでいます。講読の資料として、すべての単語に訳語と文法の説明を施したものを事前にお渡しし、予習と復習の便宜を図っています。興味のある方は、お気軽に山の学校までお問い合わせ下さい。

